

松岡光治編『ギッシングの世界：全体像の解明をめざして（没後 100 年記念）』

大野 龍浩、『英語青年』150.2 (2004): 119-20.

ジョージ・ギッシング（1857-1903）の魅力は、青春の蹉跎から招いた貧苦にあえぎながらも努力を重ね、19歳で処女短篇を著してから46歳で客死するまでの27年間に、22編の長篇を含む140編近くの作品を残した刻苦勉励にある。

ヨークシャの薬剤師の家に生まれた美青年。秀才の誉れ高かった18歳の春、愛した娼婦ネルを救うために働いた窃盗が、彼の人生の歯車を狂わせ、生涯のトラウマとなる。放校。渡米。帰国後、21歳でネルと結婚。意に反した地獄のような結婚生活。別居。妻の死。3年後、33歳でイーディスと再婚。7年足らずで別居。下層階級の無教養な女との暮らしには懲りたはずなのに、同じ過ちを繰り返したのは、トラウマから来る自信喪失による。2年後、知的レベルの合致する仏人翻訳家ガブリエルと秘密裡に再々婚。4年後、南フランスにて病没。この間、恵まれない環境のもとで苦闘する人々の暮らしを、つぶさに観察し、活写した。死の一ヶ月前、H. G. ウェルズから届いた手紙には、「もう君は英国でも有数の作家だ。戻ってきたまえ」とあった。

本書は、内外の代表的なギッシング研究家を執筆陣に擁する、画期的な研究書である。巻頭言は、泰斗クスティヤスによるもので、この作家への愛情と日本の研究者への敬意に満ちあふれている。1章「ギッシングの生涯」は、コールグによる評伝の翻訳。作者の生涯と代表作の特徴を概観する。クスティヤスによる論文の翻訳である2章「没後100年間におけるギッシング批評の進展」では、研究者が渉猟すべき文献の多さに圧倒される。3章『無階級の人々』（倉持晴美）は、作者の人生、当時の社会背景、『暁の労働者たち』との比較を絡めて、作品の意義を解説したもの。4章『ネザー・ワールド』（倉持三郎）は、個性的で多様な労働者階級の人物たちの生き様に焦点を当てた論究。5章『三文文士』（松岡光治）は、貧困の描き方について、ハーディやディケンズのそれと比較することにより、ギッシングの特徴が自然主義的リアリズムにあることを浮き彫りにする。6章『流謫の地に生まれて』（金山亮太）は、上層階級にのしあがろうとする野心と自らの下層中流階級としての出自との間で葛藤する知的主人公の性格分析。7章『余計者の女たち』（武田美保子）では、ヒステリー症を患う女性の生き方がフェミニズムと精神分

析批評を援用して解析される。論者の学識の深さが滲み出た論考。8章『埋火』(小宮彩加)は、中心人物が過去と現在のいずれを志向しているかという観点から、ギッシングの7作品と比較。さらに、伝記的事実を根拠にして、この作品は現世謳歌主義を志向すると結論づける。当時の社会背景や文化、米文学に至るまで、博識ぶりを変幻自在に織り込んで、人物分析を試みた9章『渦』(太田良子)には、この作品の訳者でもある論者の、作品への愛着ぶりが示されている。10章『イオニア海のほとり』(並木幸充)は、古典への憧憬を実現するための旅の記録であるこの作品に、キリスト教による理想的精神交流の表れを読み、そこに古代ローマを舞台にした未完の歴史小説『ヴェラニルダ』への発展性を見る。11章『ヘンリー・ライクロフトの私記』(加藤憲明)は、虚構の形を借りたこの随筆に、ギッシングの人生観の表象を捉え、要点を論者独自に整理した。12章「その他の長篇・中篇小説」(光沢隆訳)は、コールグの多識をうまく伝えた労作翻訳。「貧困は道德心を破壊する」「人格は環境の産物か、それとも遺伝か」「小説家が分析から遠ざかるほど、作品はよいものになり、読者に受け入れられる。登場人物や動機への分析は、読者にまかせればよいのであり、作者は単に事実と出来事、会話と情景を示せばいい」など、ギッシング文学の要諦が提示される。13章「短篇小説」(八幡雅彦)は、代表的な9編を中心に、短篇全般について解説。「敗北と欲求不満」が作品群の基調と述べる。14章「ギッシングとディケンズ」(小池滋)は、両作家に関する論者の博覧強記に裏づけられた、『ディケンズ論』の再評価。苦境を乗り越えて創作を続けた先輩作家を見なりたいという意志こそ、ギッシングがディケンズを尊敬する理由であると説く。15章「ギッシング関連情報」には、主要なウェブサイト、ギッシング・センターの紹介、日本における研究書誌が収録されている。最後に、クスティヤスによる年譜の翻訳を付す。各作品論の冒頭にある「梗概」は、初学者から専門家まで、幅広い読者に有用である。

編者が前著(2001)で扱ったエリザベス・ギャスケルは、20年前、マイナー作家と目されていた。しかし、研究者たちの地道な努力が実り、今はそうではない。こんどはギッシングの番だ、そんな気概を感じさせる論集である。

(英宝社、2003年12月、A5判 xxvi+404頁、4,000円)